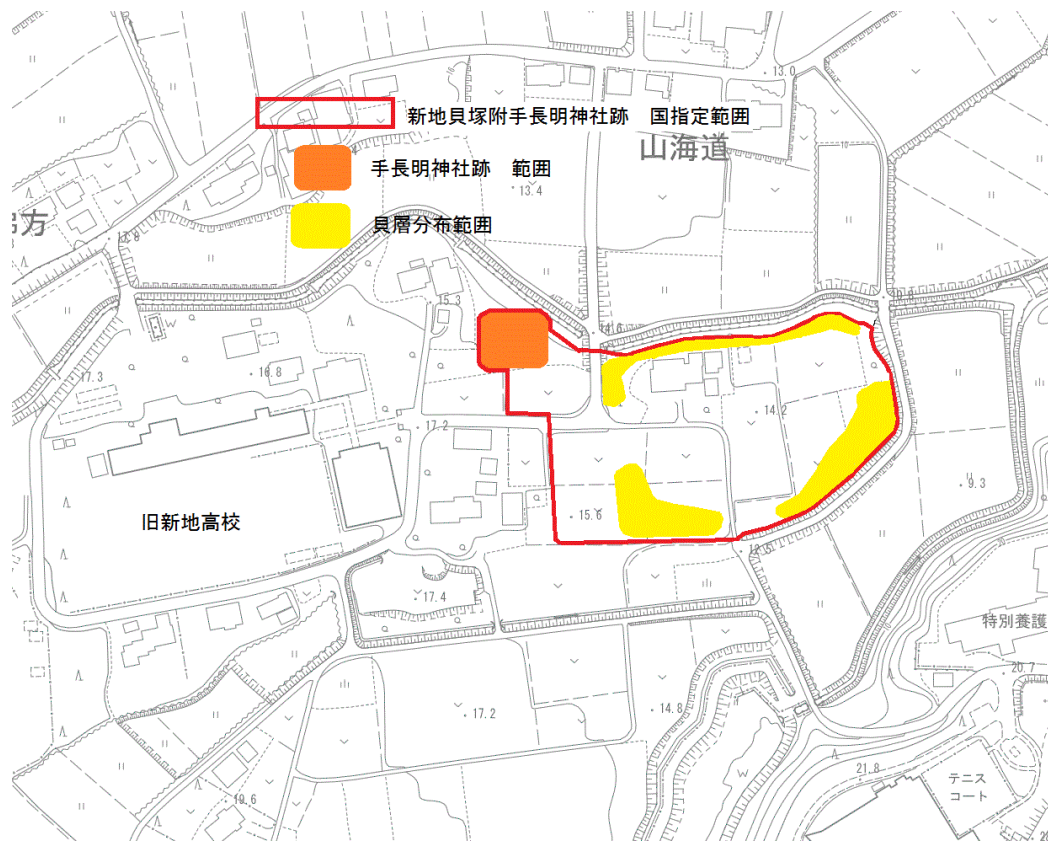


○新地貝塚附手長明神社跡 遺跡範囲と周辺地図



新地貝塚は、現在の海岸線から西に約2.5kmの小川地区に所在しています。貝塚は西から東に張り出した標高15から18mの河岸段丘の東端に形成され、段丘面の北、東、南の三方は谷地小屋地区から入り込んだ開析谷に囲まれています。

○新地貝塚の調査経歴

若林 勝邦（わかばやし かつくに）

明治23年（1890）3月23日、東京人類学会の若林勝邦は東京帝国大学の命を受けて、新地貝塚を訪れています。若林を案内したのは、相馬市中村在住の館岡虎三でした。この時の調査成果は、明治23年に発刊された「東洋学芸雑誌七巻一一〇号」「東京人類学会雑誌第57号」に掲載されました。日本で最も初めに科学的、学術的な発掘調査を行ったのはエドワード・S・モースが、明治10年に行った大森貝塚（東京）でした。モースの調査以降13年が経過していましたが、若林の新地貝塚の発掘調査は、福島県内の貝塚では最も早く科学的、学術的な調査が行われた貝塚であるとされています。

館岡 虎三（たておか とらぞう）

若林との新地貝塚での発掘調査を契機に、自らも数回にわたり「東京人類学会雑誌」上で新地貝塚に関する報告を行っています。浜通りのいわきから北の地域にあって、貝塚の発見と調査に尽力していました。その調査活動のさなか、明治26年（1893）に、三貫地貝塚を発見しています。

館岡虎三は、慶応2年（1866）現在の相馬市中村に生まれました。明治20年ごろから運送店を営む傍ら、東京人類学会員、奥羽人類学地方会員、考古学会員として登録しており、当時の中央の考古学者たちとも親交のあった地方の研究者でした。

山内 清男と八幡一郎（やまのうち すがお / やわた いちろう）

大正13年（1924）当時の福島県知事、香坂昌康は新地貝塚の詳細を知る為の発掘調査を東京帝国大学に依頼しています。東京帝国大学理学部は、この要請に応じて、人類学教室から小金井良精教授をはじめとする調査隊を編成し、内務省の柴田常恵、福島県史跡調査委員の小此木忠七郎らも調査隊に加わりました。この調査の実質的な責任者は、人類学教室の山内清男と八幡一郎でした。

調査は大正13年5月1日から8日までの一週間にわたって行われており、貝塚の南東部が調査地点とされ、2m四方の広さで、三か所が発掘されました。約50cmの厚さの表土層の下に、70cmの厚さで貝層が堆積し、その下には大量の土器を含んだ黒土層があったと報告されています。

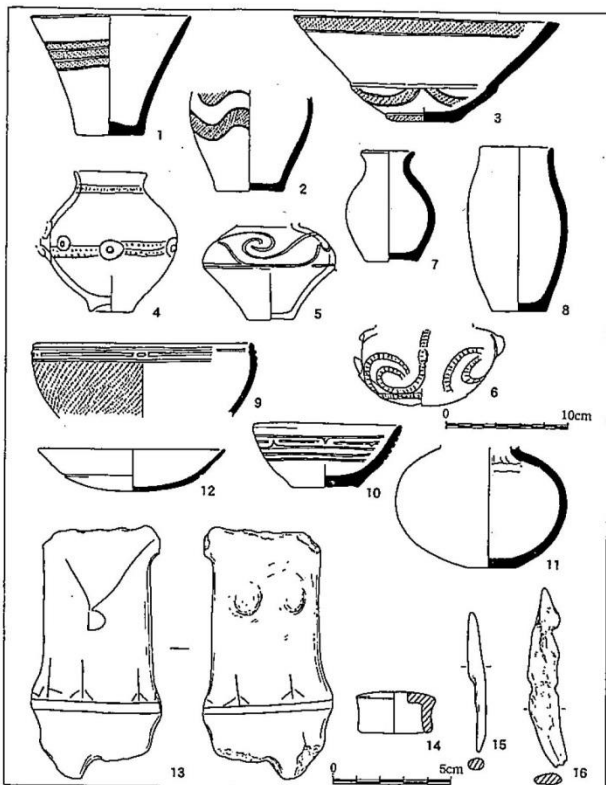
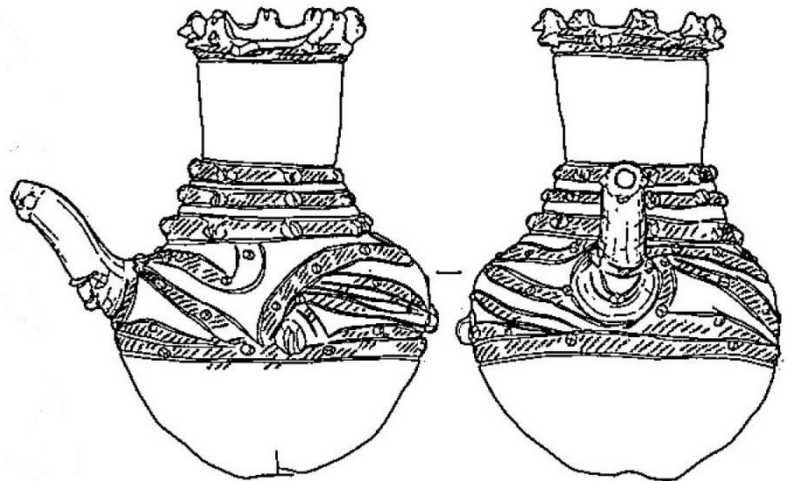
○新地貝塚の時代決定

山内は大正13年に「磐城国新地村小川貝塚発掘略記」同年「福島県小川貝塚調査報告」、昭和39年に福島県史第6巻に「小川貝塚」を著し、その成果を報告しています。八幡一郎も大正3年に「磐城国小川貝塚の骨格器」でその成果を報告しています。

また山内は、縄文土器の編年的研究で知られています。編年的研究とは、縄文土器の形や文様の違いが年代に応じて変化するものと定義する研究です。山内は、古い物から新しい物へと順番に堆積する貝塚の特徴を利用して、縄文土器を大きく縄文時代早期、中期、後期、晩期の年代毎に整理しました。こうした研究の結果から、新地貝塚から出土する縄文土器を考察すると、縄文時代後期後半から晩期前半にかけてつくられた土器であると推察され、新地貝塚は縄文時代後期後半から晩期前半に形成された貝塚として認識されました

○新地式土器

新地貝塚から出土する縄文土器には、表面に粘土の粒を貼りつけた縄文土器が見つかります。これらの土器は編年的研究の中で「瘤付土器」や「小川式土器」「新地式土器」と呼ばれ、縄文時代後期後半から晩期前半を示す土器として認識されるようになりました。



第6図 新地貝塚出土遺物 1~6・9・10縄文土器、11・12土師器、7・8時期不詳
13土偶、14耳輪、15猪、16銚 (志間泰治1984より)

1~6・9・10 縄文土器、11・12 土師器、7・8 時期不詳
13 土偶、14 耳輪、15 猪、16 銚

図11 新地貝塚出土の遺物 (1)
(志間泰治 1984より)

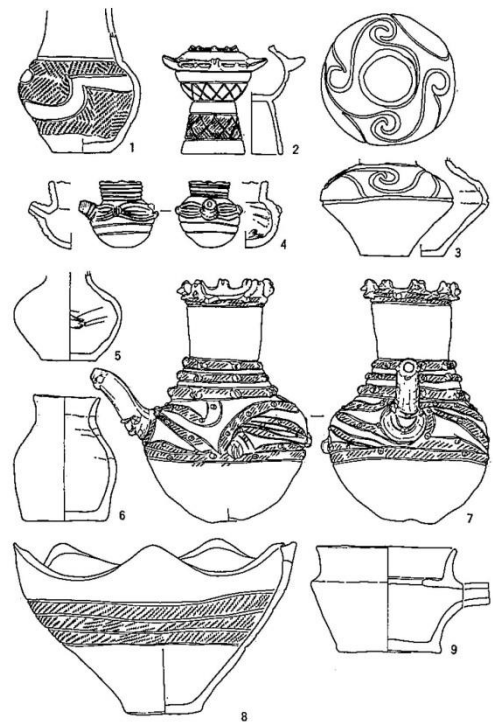


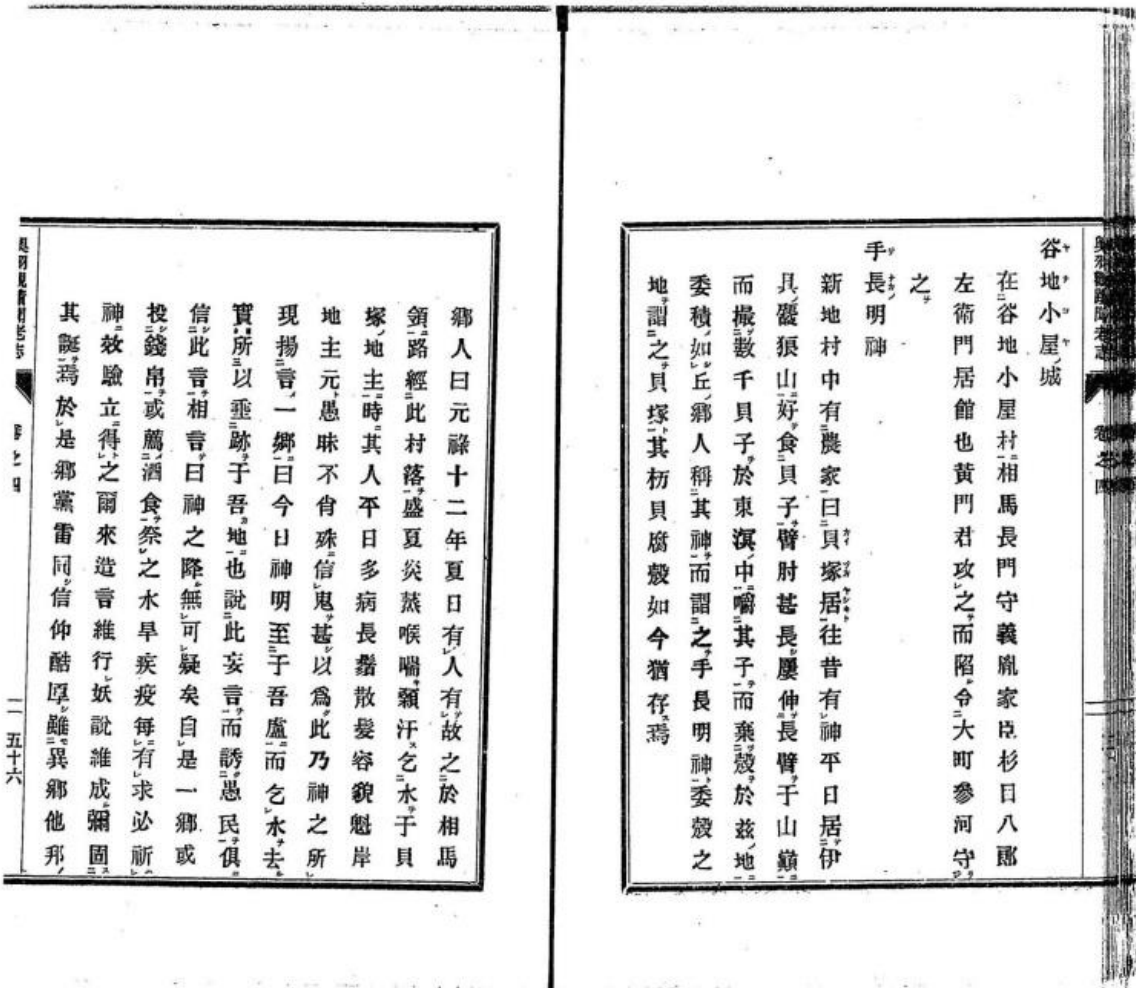
図12 新地貝塚出土の遺物 (2)

(新地町史「歴史編」より)

○新地貝塚と手長明神、鹿狼山の話

江戸時代享保4年(1719)仙台藩の儒学者佐久間義和は奥羽観蹟聞老志(巻之四)のなかで「新地村の貝塚には、『昔、鹿狼山に住んでいた手の長い神様が、東の海まで手を伸ばして貝を採り、食べた後の殻をここに棄てたから貝塚ができた』という説話があることを紹介しています。

新地貝塚が昭和6年に国史跡として指定された背景には、手長明神社をまつた神社の跡が、貝塚西側に残っており、貝塚そのものの重要性もさることながら、こうした近代以前の人々の歴史観を考える上で、学史的な重要性が評価されたからなのです。



出典：国立国会図書館ウェブサイト

(<https://www.dl.ndl.go.jp/pid/993124/1/57>)

新地村中に農家あり、貝塚^{やしき}居^{おうせき}といふ。往昔神あり、平日は伊具の鹿狼山に居て好んで貝子^{かいこ}を食す。

臂^{ひじ}肘甚だ長し、しばしば長臂^{ちようひ}甚だ長し、しばしば長臂^{さんてん}を山巔から伸ばして、数千の貝子を東浜の中に撮りて貝子を嚼んで殻を棄つ。茲の地に委積して丘の如し。郷人その神を称して之を手長明神といふ。委殻の地を貝塚といふ。その朽腐殻の如き今なお存す。

卜田祭當日於神供所燒小豆粥々上五寸掛竹管々中納百穀署依蒸氣強弱占年穀之吉凶也其事相似

騰光山

在伊手村其山秀出于群巒旭日騰于東溟則先照此峯頭故曰之騰光山上有羽山叢祠鄉人言往時建五神祠未詳祭何神也傳曰之五社壇東南臥嶺跨宇多伊達兩郡其北山曰地藏峯山間長路曰梯坂其高坂也崎嶇羊腸不減見坂之險難坂上西望則不忘山之外無數層巒峯村落

巖狼山
邑里入吟眸登々既一里餘見東瀛海上南相馬領鳥納磯以北浩蕩森茫之狀

相接騰光是亦大山也鄉人言往時有神仙常愛老巖馴白狼相伴其長臂不可量焉踞此山頭遊觀亦不知年又好食貝子仍屢伸長手於山東而捉貝子于海濱嚙其子而棄殼于宇太郡新地村落所積累之腐殼朽貝堆々若丘鄉里呼神稱手長明神号丘曰貝塚名其山曰巖狼山

大楯城

出典：国立国会図書館ウェブサイト

(<https://www.dl.ndl.go.jp/pid/993124/70>)

手長明神の話（新地町語ってみっ会より）

むがし、新地の山のてっぺんさ、白いひげを生やした手のながーい神様が、白い狼と鹿といっしょに暮していただたと。どこ行くにもその鹿と狼をつれて、うんとかわいがっていただたと。ほうして山のてっぺんさまたがって、春には、すがすがしい緑の田畑、きらきら光る青い海、秋には黄金色の稲の穂や、真っ赤な紅葉など、それはそれは豊かな新地を眺めて、心豊かに過ごしていただたと。

ある時、神様はたいそう、腹がへって、何か食うものはねえべかなあとながーい手を大戸の浜にぐうっと伸ばして、がらがら、がらがらとかんまして※1みだと、したっけ、アサリやら、ハマグリやら、ホッキ貝やら、まずいっぺえ採れだたと。食べてみたら旨かった。採って、食っては貝殻をポイツと捨てたもんで、大戸浜と山の間の小川のところさ貝殻の山ができたんだと。その貝殻の山になったところが新地貝塚と呼ばれるようになったんだと。おしまい。

※1 かんまして・・・かき回して



手長明神イメージイラスト 無断での画像の転用、転写を禁じます。

○資料のご案内

新地町図書館では、新地貝塚附手長明神社跡関連の書籍を所有しております。興味のある方は、ぜひご利用下さい。

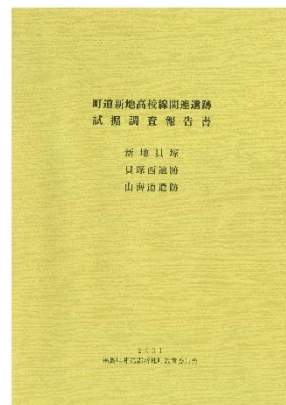
新地町図書館 TEL 0244-62-5031

図書館HP <https://shinchi-town.jp/site/library/>



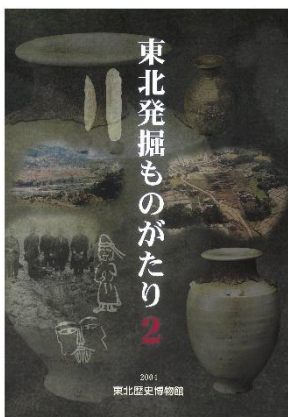
「国指定史跡
新地貝塚附手長明神社跡
保存管理計画書」

新地町教育委員会(2004)



「町道新地高校線関連遺跡
試掘調査報告書
新地貝塚
貝塚西遺跡
山海道遺跡」

新地町教育委員会(2001)



「東北発掘ものがたり2」
2004年に東北歴史博物館において行われた先人たちの発掘調査の歴史についての企画展示の図録となります。P11から新地貝塚についての記載があります。

東北歴史博物館(2004)

《参考・引用文献》

- 佐久間義和（洞巖） 「奥羽観蹟聞老志」（1719）
- 山内清男 「磐城国新地村小川貝塚発掘略記（東京人類学会雑誌第39号） 日本人類学会（-）
- 八幡一郎 「磐城国小川貝塚の骨角器（東京人類学会雑誌第40号） 日本人類学会（-）
- 若林勝邦 「磐城国宇多郡新地村貝塚発掘ノ話（東京人類学会雑誌第57号）」 日本人類学会（-）
- 若林勝邦 「磐城国宇多郡新地村貝塚続報（東京人類学会雑誌第70号）」 日本人類学会（-）
- 舘岡虎三 「磐城国宇多郡駒ヶ嶺貝塚記
貝塚ト手長明神トノ関係（東京人類学会雑誌第96号）」 日本人類学会（-）
- 若林勝邦 「磐城国新地村貝塚発掘記（東洋学芸雑誌7巻110号）」 東洋学芸社（-）
- 舘岡虎三 「磐城国新地貝塚探求報告（続報）（東京人類学会雑誌第111号） 日本人類学会（-）
- 舘岡虎三 「磐城国新地貝塚探求報告（続報）（東京人類学会雑誌第112号） 日本人類学会（-）
- 文部省 「文部省史跡調査報告 福島県新地貝塚附手長明神社趾」 文部省（1932）
- 山内清男 「福島県小川貝塚調査報告（先史考古学会会報）」 先史考古学会（1967）
- ☆新地町教育委員会 「新地町史 資料編」（1982）
- ☆新地町教育委員会 「新地町史 歴史編」（1999）
- ☆新地町教育委員会 「町道新地高校線関連遺跡試掘調査報告書
新地貝塚 貝塚西遺跡 山海道遺跡」（2001）
- ☆新地町教育委員会 「国指定史跡新地貝塚附手長明神社跡保存管理計画書」（2004）
- ☆東北歴史博物館 「東北発掘物語2」（2004）
- ☆福島県文化センター白河館 「ふくしま考古学研究の春暁平成24年度」（2012）

著書名の先頭に☆印のある資料は新地町図書館で蔵書しております。